金沢大学歴史言語文化系論集
言語・文学篇

第五号 二〇〇三年 一二四二

最末期の金沢蕉門

一戸渉・高橋悠里

はじめに

本稿は石川県小松市において東酒造を営んでおられる東栄松氏御所蔵の幕末から明治期の金沢の俳人、宮森北葉（天保十二年）の俳資料番号17の全集を翻訳した東栄松氏の談話によれば、当該資料群はもともと同氏の母堂にあったもので、確かな伝来をもつものである。

宮森家から持参して来たものとの由で、当該資料群はもともと同氏の母堂にあったものである。

前書きで述べてゆくように、当該資料群は、従来の研究において未解明の部分が大きい。

明治二十年代から三十年代にかけての金沢の俳壇の動向について年次の指針を示している新派の動向に比して、旧派の動向について年次の変化を追って記述しており、有益である。といえば、同時に旧派の動向については、年代記的な記述スタイルを採用しているが実状のようである。

例えば、北葉は「俳壇に近いのもの」といいうが、それに踏み込んだものとはいいがたい。とはいえ、上述したような今回の構造的な俳壇の動向については、大いに検討の余地を残しているというの

今日の幕末明治期における金沢俳壇の研究状況に鑑みれば、その土

～東栄松氏所蔵宮森北葉関係俳資料をめぐって～
台となる一次資料の整備に着手することが、まずは求められるべきものと考える。本稿をひとつの描き台として、当該時期の金沢俳壇史の研究が今後より一層進展してゆくことを望みたい。

一、宮森北葉のこと

当該資料群の旧蔵者である宮森北葉は、今日の俳諧史研究におい

て、しばしば見られる人物といえる。菅原の評、彼について

触れている先行研究はごくわずかであり、石川県教育会金沢支部会編

『金沢市教育史稿』（九九九）

とあり、大河内『新編加賀養樂Lexicon』（金沢文化協会）

一九三八の

慶応四年春に、

『金沢市教育史稿』（九九九）に、

宮森北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

このとき、宮森北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。

近く、北葉は俳人なり。金沢新巻町一丁目に住し、舞木筆を以

て業し、百錦縁を継ぎ、蓋雪杖の後なるべし。明治三十

六年六月八日没す、年六十三、掌に受けて見る御隠の雪のか

時雨るや鮮麗の深き千代見草、等の詠あり。
雪杖筆の芭蕉『幻住庵記』の一軒がある『資料番号1・稿末図版1』に、『雪杖筆の芭蕉』の引用があります。恐らくは雪杖が北集へと贈られたものであろう。雪杖と北集との関係に何か関連があるのか、未詳である。芭蕉の作品をくわしく述べるためには、『雪杖筆の芭蕉』の存在が不可欠である。

この雪杖について、芭蕉は次のように述べています。

「雪杖は金沢の乞食坊主にして、山崔とも号す。俳諧を善くす。雪杖は貧者の身分にありながら、俳句を手に持つことは非難されている。しかし、雪杖は貧者の身分に拘らず、詩を求めて生涯を送り、その詩を世界に知らしめるために尽力している。」

更に、『福沢市教育史稿』の福沢雪杖は、次のように述べています。

「福沢雪杖は、手漉きの絹の排筆を手に持つ俳句を書く。雪杖は、人々の目を引く俳句を書くことに情熱を注ぎ、その詩は世間を震撼する。」

以上の内容から、雪杖の俳句の真髄を追求するためには、芭蕉の『幻住庵記』を必読とすべきである。
百鶴庵の継承について

先行研究において、北葉は石因以来の百鶴庵を雪枝から継いだとし、「百鶴庵の図」すなわち、この庵を構成する資料番号16のものがあるものであることを確認している。そこで、当該資料群には「百鶴庵の図」を構成する資料番号16のものがあるものであるとされている。そこで、当該資料群には「百鶴庵の図」を構成する資料番号16のものがあるものであるとされている。

形の図面及び図面等に関する写本（資料番号5）には、文房具や書などといった木工品の図が、寸法やディテールの指定などと共に正確な書が示されており、木工術の指針として用いられている。加えて資料番号5の図面群の中に、元は石因の写本の裏表紙の内容として用いられている「北葉書」とこれを構成する資料番号7のものがある。これらは「北葉書」という写本の裏表紙の内容として用いられている。「北葉書」とこの資料番号7のものがある。

雪枝の後世における伝承について

雪枝は、北葉が石因以来の百鶴庵を雪枝から継いだとし、「百鶴庵の図」を構成する資料番号16のものがあるものであるとされている。そこで、当該資料群には「百鶴庵の図」を構成する資料番号16のものがあるものであるとされている。そこで、当該資料群には「百鶴庵の図」を構成する資料番号16のものがあるものであるとされている。
百々庵と号した。明治三十二年六月四日没。享年七十八である。
百々庵はのち北佐がついた。（三三頁）

二、俳諧を通じた交友と諸活動

北佐は加能俳諧を俳人として知られ、朝廷内の俳人の集まりに参加していた。北佐は加能俳諧を通じて交友を築き、多くの詩人と交流した。北佐の交友を通じて、北佐の俳諧活動についての記述が見られる。

連句稿は当該資料中に九点が確認されるが、その内容は非常に多く、北佐の交友と俳諧活動についての詳細を提供している。

東慶松氏の談話及び宮田義之氏書訳によれば、宮田義之はかつて金沢市中町の現在の北陸電力石川支店の裏手あたりの武家屋敷に住居を構えていたとの由である。前掲「金沢市教育史編」では、北佐の住居は「金沢新町二丁目」とされている。両者とも現在でも残る地名であり、位置関係も近いが、それ以上のことは未詳とするほか、

三、技術的及び語彙的考察

北佐は加能俳諧を俳人として知られ、朝廷内の俳人の集まりに参加していた。北佐は加能俳諧を通じて交友を築き、多くの詩人と交流した。北佐の交友を通じて、北佐の俳諧活動についての記述が見られる。

連句稿は当該資料中に九点が確認されるが、その内容は非常に多く、北佐の交友と俳諧活動についての詳細を提供している。

東慶松氏の談話及び宮田義之氏書訳によれば、宮田義之はかつて金沢市中町の現在の北陸電力石川支店の裏手あたりの武家屋敷に住居を構えているとの由である。前掲「金沢市教育史編」では、北佐の住居は「金沢新町二丁目」とされている。両者とも現在でも残る地名であり、位置関係も近いが、それ以上のことは未詳とするほか、

四、技術的及び語彙的考察

北佐は加能俳諧を俳人として知られ、朝廷内の俳人の集まりに参加していた。北佐は加能俳諧を通じて交友を築き、多くの詩人と交流した。北佐の交友を通じて、北佐の俳諧活動についての記述が見られる。

連句稿は当該資料中に九点が確認されるが、その内容は非常に多く、北佐の交友と俳諧活動についての詳細を提供している。

東慶松氏の談話及び宮田義之氏書訳によれば、宮田義之はかつて金沢市中町の現在の北陸電力石川支店の裏手あたりの武家屋敷に住居を構えているとの由である。前掲「金沢市教育史編」では、北佐の住居は「金沢新町二丁目」とされている。両者とも現在でも残る地名であり、位置関係も近いが、それ以上のことは未詳とするほか、
春庵桃芳こと佐々木英之郎の居宅を指す。
三・宮森家伝来伝書類について

後掲の目録に記したことに、当該資料群には筒子装の劍術・華道
の伝書類四点が含まれている。所蔵者は東方の談話によれば、
他の資料と同じく宮森家伝来のものであるが、これらは別の一とま
まりとして残されていったものとの事である。従って、目録での整
理番号には「伝」を冠し、他と区別できるような措置を行った。

実事、これらの伝書類は、その内容に照らしても、本稿で以上に
論じてきた宮森北業関連資料とは性格を異にする。とはいえ当然な
がら宮森家との関わりは確認できる。宮森家の家系とも関わるもの
であるため、以下に判明した限りのこについて記しておく。

まず資料番号・伝一の「水野伝流劍術初伝」であるが、広瀬
顕一より水野伝流劍術を伝えとした宮森富雄については、藤野勝
に生れた。中学校卒業し慶応三年金沢第四高等学校で同月、
同三十三年六月東京私立大倉商業学校（現在の東京経済大学・論者
注）の教諭となり前後三十八年間といふ長い歳月を同校に過ごし
教育に貢献したのであった。その後抜擢されて台湾の台中商業
学校の教諭となって赴任し、大正九年七月には台北師範学校の
教諭に転任した。越えて同年十二月に聴せられた朝鮮入

羅南公立高等女学校長従四位宮森富雄氏は、明治七年金沢市
に生れた。中学校卒業し慶応三年金沢第四高等学校で同月、
同三十三年六月東京私立大倉商業学校（現在の東京経済大学・論者
注）の教諭となり前後三十八年間といふ長い歳月を同校に進し
教育に貢献したのであった。その後抜擢されて台湾の台中商業
学校の教諭となって赴任し、大正九年七月には台北師範学校の
教諭に転任した。越えて同年十二月に聴せられた朝鮮入

他の資料と同じく宮森家伝来のものであるが、これらは別の一とま
まりとして残されていったものとの事である。従って、目録での整
理番号には「伝」を冠し、他と区別できるような措置を行った。

実事、これらの伝書類は、その内容に照らしても、本稿で以上に
論じてきた宮森北業関連資料とは性格を異にする。とはいえ当然な
がら宮森家との関わりは確認できる。宮森家の家系とも関わるもの
であるため、以下に判明した限りのこについて記しておく。

まず資料番号・伝一の「水野伝流劍術初伝」であるが、広瀬
顕一より水野伝流劍術を伝えとした宮森富雄については、藤野勝
に生れた。中学校卒業し慶応三年金沢第四高等学校で同月、
同三十三年六月東京私立大倉商業学校（現在の東京経済大学・論者
注）の教諭となり前後三十八年間といふ長い歳月を同校に進し
教育に貢献したのであった。その後抜擢されて台湾の台中商業
学校の教諭となって赴任し、大正九年七月には台北師範学校の
教諭に転任した。越えて同年十二月に聴せられた朝鮮入
東氏の母堂の実父にあたるとの由である。右に整理した宮経祥世氏書信の内容とも併せて考えれば、北原は富雄雄の実父であったと云って疑いない。ちなみに、富雄雄が生まれた明治七年には、天保十二年（一八四）生まれと思われる北原は三十四歳にあたる。

また伝授を授けた彼の顕識、広義顕一にに関しては、幕末明治期の直結家であつたこと以外にはほぼ未詳である。九九九年、守田喜三郎（加賀武術の遺脈、金沢工業大学古武道部）によれば、金沢市長坂の大乗寺に『百位顕一先生之墓』と称され、明治四十一七年七月二十日に建てられた彼の墓碑が現存しているという（九九九年六月）。

資料番号・伝授顕一の巡州衝撃の伝授書を伴せた（松尾書）は未詳。これに伴う伝書の選名書『玉十二』と『須二』は、成立時期の近さから見て同一人物と思われるが、宮経家的人物どうしの間、立場の近さから見て同一人物と思われるが、宮経家的人物どうしの間、近世期から続くこうした動きの軸が奈良にあったかを示している。近世期から続くこうした動きの軸が奈良にあったかを示している。

正岡子規らにより、「旧派の月次会レッテル張りされ、いわゆる伝書について記述した。」中でも伝書の点数の集ま、彼の俳諧活動の軸が奈良にあったかを示している。近世期から続くこうした動きの軸が奈良にあったかを示している。

以上、東原松氏が所蔵する宮経北葉の俳諧を中心とする新出資料群について記述してきた。中でも伝書の点数の多さ、彼の俳諧活動の軸が奈良にあったかを示している。近世期から続くこうした動きの軸が奈良にあったかを示している。

乙丙（末尾）にによって率いられることになる。本来は新派俳句の結社である北原会が竹村秋竹の主唱によって結成され、その後京都帝大の教授となる近世文学研究者の藤井亮にによって率いられることになる。本来は新派俳句の結社である北原会が竹村秋竹の主唱によって結成され、その後京都帝大の教授となる近世文学研究者の藤井亮にによって率いられることになる。

正岡子規らにより、「旧派の月次会レッテル張りされ、いわゆる伝書について記述した。」中でも伝書の点数の集ま、彼の俳諧活動の軸が奈良にあったかを示している。近世期から続くこうした動きの軸が奈良にあったかを示している。
係資料など、様々な分野において研究資料として活用しきれる可能性を有するものも含まれていることをいれておく。

注

1. 越前利代氏の御教示によれば、「金沢市教育史稿」に先行して、
2. 加賀介人記「加越能」第十九四、五両月号、「一九三三年六月」発行に、ほぼ同題目の北極に関する記事があり、「石川県俳壇史」の記事をこれに摂ったものとの由である。
3. 本文の引用には、引用の片仮名漢字を平仮名漢字に改め、会話語に関しては括弧で括り、詰読点を私に訂じた。
4. 本文の引用にあたって、原版の片仮名漢字を平仮名漢字に改め、会話語に関しては括弧で括り、詰読点を私に訂じた。文末には現代で読むことができなかった。
5. 参照は「金沢市立玉川図書館近世史料館」(http://www.lib.kanazawa.shikoku.jp/kensei/chupertino.pdf)を参照に詳しい。
7. 萩原茂雄『石橋町月研究』(評伝と考証)(八木書店、二〇〇〇年)。
東栄松氏所蔵
宮森北葉関係資料目録

一、 書名
二、 書名の別
三、 書名の別
四、 書名の別
五、 書名の別

○ 俳譜

北枝水茎塚録
写 半紙 一冊 2

梅室両吟集
写 小本 一冊 4

句稿断簡
写 10

○ 連句
○ 華道

遠州流挿花初伝之巻
写  巻子本  一冊  伝  2
○ 剣術

水野一伝流剣術初伝
写  巻子本  一冊  伝  1

宮森家伝来伝書類目録

附

〔未詳書裏表紙乾〕
写  一葉

○ 華道

遠州流挿花中伝之巻
写  巻子本  一冊  伝  3

宮森家伝来伝書類目録

附

〔未詳書裏表紙乾〕
写  一葉

○ 剣術

水野一伝流剣術初伝
写  巻子本  一冊  伝  1

郡名書「玉図子」
表紙欠
最水き日にさかりする妹
形もなき嘆しの実春の旅
眉にこたる縄の貫指

数重代花の主と名の高き
昔から左選人の絶々縄
銀の融通の多い織締

芦稲に見心に華
十千鶴に草も短夜

北薬

粒雨も漏らぬ木下や音水
叩く千鶴にさらす短夜

北薬

材木に立ち印打ち

北薬

撮って居れは寝入つ伊田かに

北薬

獨の子の可愛かる程愛らしき

北薬

鄉の揺れかな風

北薬

江の水すもむや餘寒の空も澄

北薬

芽張り柳の　すはる四阿屋

北薬

何人敗春の旅路を縫着て

北薬

舞水

無水

舞水

舞水

無水

舞水
寒桜に久くらし込む月の口
嘯きの程虫の鳴たつ
釜の音も更行惚に秋ききて
呑まれてから直す口中口
青風に笠をおる松山
振袖月を打水の様
見えぬある女の魅満伐
灯提の邪魔になりたる月明り

雨の日は織りくくる日を暮しに決る

□□の凄き木下に苔滑る
慈悲心の声の心す
□□には切て目眞しき冷し瓜
砂打払猟犬の鶻
粟は内親王と鶴踊き

□□の凄き木下に苔滑る
慈悲心の声の心す
□□には切て目眞しき冷し瓜
砂打払猟犬の鶻
粟は内親王と鶴踊き
帰りのあいも、岩の鼠が
赤い葉に、花の香り

破軍星をはなした

無事の寒さを

風は山の

赤い葉に、花の香り

赤い葉に、花の香り

破軍星をはなした

無事の寒さを

風は山の

赤い葉に、花の香り

赤い葉に、花の香り